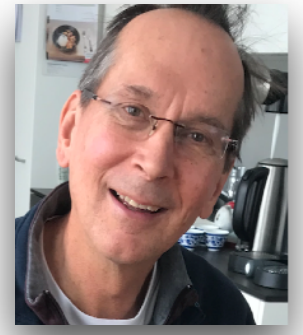
ちいさな証

神様はいつも私の近くに

ロイ　マコール
アッペンツェル外州・トイフェン村在住



私は昭和30年（1955年）米国の長老派宣教師の長男として神戸で生まれました。父が創立を手伝った教会のある岐阜県大垣市に移り住み、私は東小学校に2年生まで通いました。東小学校では私は大切な友達として受け入れられ、大垣を離れることになったとき、先生と級友は寄せ書きを添えた立派なアルバムを贈ってくれました。そのアルバムは今も私の住まいの居間に”宝物”として保管されています。

私の父は海軍の整備士でしたが、戦後の焦土と化した東京の悲惨な有様を目の当たりにし、神様の愛を届けるべく宣教師として日本へ戻りました。母は中国への宣教師として神戸に来たあと、私の両親は神戸で結婚しました。新婚旅行は、当時蒸気機関車の走る参宮線で伊勢そして長良川でした。その話をするたびに両親の心は懐かしさで満たされたものでした。

神学校時代、父は聖書学校の子供達をハーレーに乗せていた。

台湾での楽しかった家庭生活

教会での役目を終え、私たちは台湾の高地民族に伝道する為に引っ越しをしました。私たち家族は異なった文化を持つ二つの国で、日本語と台湾語を使い、幸せな家族生活を送ることが出来ました。

私はアメリカでの勉学を終え、私の第二の故郷である日本で米国の農機具会社、そして日本の金融会社で働いていましたが、1990年代初頭、日本のバブルが崩壊し、私は解雇されました。その後、天津の南開大学でMBAレベルのビジネス、そして北京大学で英語と中国語で金融論を教えていました。そして北京のインターナショナル教会で、北京のスイス大使館で外務省職員として働いていたスイス人女性のマヌエラと知り合い、そして恋に落ち、1999年に結婚しました。

妻の赴任に伴い、ニューヨーク、リヤド・サウジアラビアに移り住み、また北京に戻り、そしてワシントンDC、テヘランへと世界各地に移り住みました。その間、二人の娘はニューヨークで、三女はサウジアラビアのリヤドで生まれました。現在は、長女はバーゼルで研究生活、次女は看護師への修学中、末娘はアッペンツェル州トローゲン村にある州立高校で学んでいます。

三人の娘・ワシントンで

キリスト教は将来が読めない不確実性を扱っており、私たちは、これから自分たちの上に起こることを知らないし、多くのことを自分たちの力と意思でコントロールすることも出来ません。しかし、日々、神様の恵みの中にあって、悔い改め、希望と確信をもって生きることは出来るのです。

私の霊的覚醒は突然に起こったのではなく、徐々に起きたように思います。聖書を読み始め、救い主を求め始めたとき、自分の知恵や能力、そして、努力によることなく、主によって自分というものが変えられていったように思います。私は中国語を学んだり、日本語を磨いたり、日曜学校で教えたり、聖歌隊で歌ったり、神様は多くの賜物を惜しむことなく与え、それを使う道も備えてくださっていました。また、アルバイトをしてお金を貯め、18歳のときに、イスタンブールからインバネスまで、ヨーロッパ一人旅を可能にしてくださいました。

自分が置かれている状況に感謝し、目の前にあるチャンスを知り、そこから生まれる良いことを認識する。それは神からのものであり、聖霊の証拠だと思います。感謝はクリスチャン生活の中心であります。なぜでしょうか？感謝は祝福を受け取る手だてだからです。私たちが感謝すればするほど、神から私たちにはより多く受け取ることができるのです。

私は日本と台湾といったアジアで生まれ育ったので、リタイア後は、アジアで暮らすことを予想していましたが、まさかスイスの田舎でリタイアするとは思ってもみませんでした。そして、終の住処としたトイフェンの村で、日本語を話し、同じ信仰を持つ日本人がすぐ近くに住み、親戚のような交わりをするとは夢にも思っていませんでした。

想像を遥かに超える神様の采配、そして摂理のなんと見事なことでしょう。神は想像をはるかに超えることがお出来になります。［エペソ人への手紙 3:19,20,21］